

特101

674

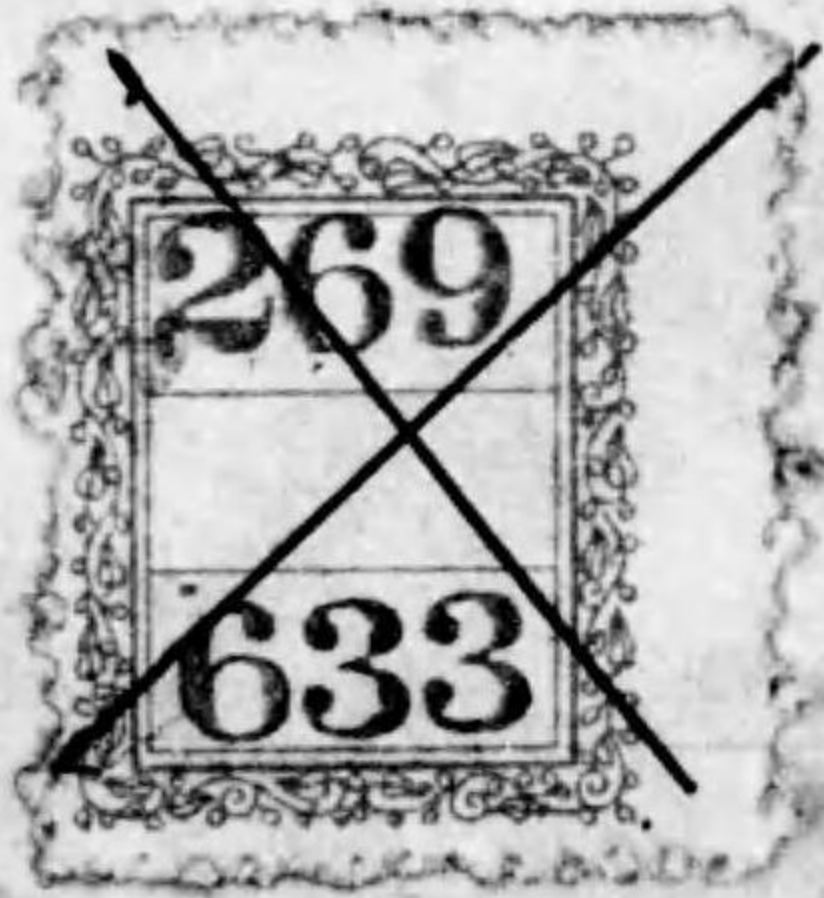
體俗

新詩

葉散史著作

安德帝の詩
隅田川譽の詩
不如歸の詩

阿新丸の詩
村上義光の詩



始



(ハ)調三拍子 安徳帝の歌

1. 1. 3. 3.	2 1 2 3	5 5 5 6	5 0	3 3 5 5	3 2 1 1
ヒイヅル	クニニト	ウタワレ	シ	ハナナ	ミヤコノ
2 2 3 2	1 0	i i i 3	2 i 6 6	5 5 6 5	5 0
ニホン	シ	カキガラ	チヤウノ	ミヤシロ	ニ
3 3 5 5	3 2 1 1	2 2 3 2	1 0		
レイダ	コトニ	アラタカ	ク		

大正
1. 10. 2 1.
内交

(ハ)調二拍子 隅田川響の歌

1. 1. 3. 3.	2 1 2 3	5 5 5 6	5 0	3 3 5 5	3 2 1 1
カ ー ネ ハ	ウ ヘ ノ カ	ア サ ク サ	ト	オ ー ト ニ	ナ ダ カ キ
2 2 3 2	1 0	i i i 3	2 i 6 6	5 5 6 5	5 0
セ ソ ソ ー	ッ	ヒ ー ト ノ	タ ヘ ヤ モ	ナ カ ミ セ	ノ
3 3 5 5	3 2 1 1	2 2 3 2	1 0		
ア ー サ ナ	ユ ー ナ ノ	ニ キ ワ イ	ハ		

(ハ)調二拍子 不如歸の歌

1. 1. 3. 3	2 1 2 3	5 5 5 6	5 0	3 3 5 5	3 2 1 1
ノドカニ	カーヌム	ハルノノ	ユ	ハルカニ	チガルル

2 2 3 2	1 0	1 1 1 3	2 1 6 6	5 5 6 5	5 0
バソドク	ヤ	チーカク	ソビユル	ハルチサ	ソ

3 3 5 5	3 2 1 1	2 2 3 2	1 0
アーカーヌ	クソキヲ	チガムツ	ツ

(ト)調四拍子 阿新丸の歌

1	1	2	2	6	6	5	6	2	2	2	1	2	-	0	0
ミ	ヤ	コ	ノ	ソ	ー	ラ	ハ	ハ	ル	ナ	レ	ド			
1	1	2	2	3	3	5	3	2	2	2	1	2	-	0	0
ワ	ー	ガ	ミ	ヒ	ト	ツ	ハ	ア	キ	ノ	ヒ	ノ			
6	6	6	6	6	6	5	3	6	6	5	6	2	-	6	5
ク	ー	モ	リ	ガ	チ	ナ	ル	ム	ネ	ノ	ウ	チ	ー	6	5
3	3	5	5	6	6	5	3	2	2	2	1	2	-	0	0
カ	ー	レ	ニ	カ	タ	ラ	ン	ハ	ハ	ウ	エ	ニ			



(ト)調四拍子 村上義光の歌

1	1	2	2	6	6	5	6	2	2	2	1	2	—	0	0
ミ	ド	リ	モ	フ	カ	キ	マ	ツ	バ	ラ	ノ				
1	1	2	2	3	3	5	3	2	2	2	1	2	—	0	0
マ	ー	ツ	ノ	コ	ノ	マ	ニ	ミ	ヲ	ヨ	セ	テ			
6	6	6	6	6	6	5	3	6	6	5	6	2	—	6	5
ヤ	ー	ヤ	ヂ	ハ	ル	カ	ニ	ミ	ヲ	タ	セ	バ			
3	3	5	5	6	6	5	3	2	2	2	1	2	—	0	0
タ	カ	ホ	ニ	ツ	ー	ヅ	ク	シ	ラ	ハ	タ	ハ			

安徳帝の歌

水天宮みづあまのみや安徳帝あんとくていの御歌みんかうた

◎ 壽じゆ永えいの昔むかし

日出ひる國くにと謠うたはれし

花はなの都みやこの日本橋ほんはし

蟬せみ殻がら町の御社みやしろに

靈たま驗げん殊ことにあらたかく

綠葉散史

人ひとを護まもらせ玉たまひぬる

水天宮みづあまのみやの宮みやはそも

如何いかなる神かみに御在おはすらむ

記しるすも畏おそれ多おほけれど

歌の帝徳安

仰ぎ奉らん世の人に

いざや語らん其の昔

●平家の都落

頃は壽永の末なりき

身に泌む風の吹初めて

葉末の露は最と重く

白萩風になびく夜を

月に啼くなる雁の聲

世は何處となく淋しげに

物の哀れを告る頃

茲に平家の公達は

旅寝の床の草枕

露も涙を争ひて

只物のみぞ悲しまれ

何時か戻らん'sもなく

曩に入道相國が

歌の帝徳安

作り置きたる福原の

都の様を見給ふに

春は花見の岡の御所

秋は月見の濱の御所

松陰殿に泉殿

扱は馬場殿初とし

仰ぐ二階の座敷殿

雪見の御所や萱の御所

鴛鴦の瓦に石畳

人の館は悉く

三年が程に荒れ果て

道を塞げる苔の色

門をば閉づる蜘蛛の網

家根の瓦に松生ひて

館の垣に蔦茂り

臺は下に傾きて

松風のみや通ふらん

簾は破れて散りくくに

安徳帝の歌

閨の奥さへ現はれて
月影のみを差入りぬ
明れば宮の人々は
奢り榮えて昨日迄
浮世を夢に送りける
此の福原へ火をかけて
畏れ多くも『安徳』の
主上をば奉じ参らせて
御船にこそは召てける

船は波路を漕ぎ出て
都の方を眺むれば
盡ぬ名残は惜しまれて
海士の焼く藻の夕煙り
尾上の鹿の曉の聲
渚に寄する波の音
袖に宿かる月の影
千種にすだく蟋蟀
總て見るもの聞くものは

安徳帝の歌

哀を誘ふ基にて
心痛めぬ物ぞなし
偲ぶも今は涙かな
盛り極めて昨日まで
華の如くに美々敷も
轡駢べし十萬騎
今日は遙の西の海
浪に漂ふ身となるも
忠義を思ふ人々の

數は僅かに七千餘
海面見れば影うごく
深紫の雲の色
早や暮れて行く天際に
行衛や遠き雁音の
もろ羽は彩にうつろひて
黄金の波に漂ひぬ
朝夕と刻みてし
天の柱の影くらく

歌の帝徳安

雲の帳もひとたびは
輝きかへる高御坐
西に傾く秋の日は
遠く光彩を沈めけり
懸て泛べる月影に
曲浦の波を押し分かつ
潮に引かれて行く船に
乗れる平家の人々の
心の裡は如何ならむ

水の流れと人の身の
行末知れぬ習ひとは
誰が云ひ初めし言の葉か
移れば變る世の中の
榮枯盛衰是非もなき

●屋島の戦ひ

やがて屋島の戦ひに

歌の帝徳安

又も敗れし平軍は
更に屋島を落ち延びて
西海道へ遁れんと
築紫を指して漕ぎ行けば
此所も源氏の味方にて
寄るべき方もなくなりに
哀れ長門の壇の浦
赤間關や門司の浦
波に漂ふ船の中

「帝」を首め奉り
建禮門院、二位の尼
物や哀れに其の日をば
送らせ給ふぞ悲けれ
戦に勝てる源兵は
屋島の内裏を追落し
平家の船の行くまゝに
陸より攻て追ひ立つる
其の烈げしきは中々に

歌の帝徳安

燒野の雉の隠れなく
鷹の攻むるに異ならず
源氏の大將義経は
進み進みて平軍の
陣を去る事二十町
其の名も勝や阿波國
勝の浦にぞ着てける
大軍既に十餘萬
ドツと揚げたる関の聲

山岳爲に震ひ出し
海底深く響きける
夫れのみならず範頼は
千葉常胤を始めとし
稻毛、中條、海老名など
三萬餘騎を引卒れて
九州よりぞ攻め來る
海には兵船數多く
陸には轡を並べたり

歌の帝徳安

東西南北塞がれて
今や平家は籠の鳥
遁れ出べき道もなし
時に平家に人ありと
敵も味方も怖れける
新中納言知盛は
船の舳に立ち出て
味方の兵をさしまねき
聲高からに呼りつゝ

軍は今日を限りなり
聞けや者共進む共
必ず退く事なかれ
遠く神代の昔より
近くは今に至るまで
軍破れて不幸にも
武運の盡る其時は
名將勇士と呼ぶるとも
名も無き者の手にかゝり

歌の帝徳安

或は斬られ生け捕られ
耻を晒すに至るのも
身は武夫の甲斐もなく
死を遁れんと思ふなり
各々忠義の其爲に
命を此所に打捨て
美名を後の世に留
必ず共に東國の
彼の奴輩に後るなよ

抑々何の科ありて
命を惜む事やある
いざや心を一つにし
源氏の大将義経を
捕へて海に投げ込めよ
今日の戦ひ呉々も
敵に後を見するなと
勵ます聲の終らぬに
是も平家に名の高き

歌の帝徳安

悪七兵衛景清は
一ツの船に躍り出て
味方の者に申やう
見よ關東の者共は
馬上の戦争強くとも
船の戦争の未練さは
恰かも魚の木登りを
見るに均しき者なるぞ
進め者共退くな

聲を限りに勵ませば
早や矢戦さは始まりて
源氏平氏の船よりは
互ひに遠矢を放ちける

壇の浦

狂瀾怒濤天を衝く
大海原の只中に

船を進めし源氏兵

中にも三浦義盛は

小船に楯を突立て

此方を指して漕ぎ寄せぬ

平家の侍是を見て

差詰めし射倒せば

元來り馴し精兵の

鏃に廻る者もなし

斯て兩軍入り亂れ

或は攻つ又た追はれ

海上忽ち修羅場に

何時果つべきの見込なし

此時平家に從へる

民部大輔成良は

忽ち心打ち變り

一族揚げて三百の

船の舳を廻らして

俄かに平家を射立ける

此の有様を眺めたる

新中納言知盛は

怒れる顔に朱を注ぎ

愈々味方を勵まして

源氏の軍に突進す

あゝ勇ましや勇ましや

●海の不思議

思ひも寄らぬ裏切りに

源氏の兵は力を得

平家の船に漕ぎ寄せて

忽ち船に飛び移り

敵を斬る事數知れず

然れど平家も必死にて

命限りに戦へど

寄せ来る敵の多くして

飛び来る矢先に堪り得ず

歌の帝徳安

水手かんどり櫓をすてゝ
楫を枕の討ち死に
船さへ今は儘ならで
早や負け色となりける
覺悟極めし知盛は
『帝』の上を案じつゝ
女院の君や二位殿の
御船の中へ行きければ
從へ奉る女房達

右よ左りと袖引て
如何に成り行く事かやと
涙と共に尋ねられ
何んと答へも知盛は
態と作りし笑ひ顔
言葉徐かに云るやう
兼て覺悟の事なれば
今は何をか申すべき
只々珍らしき勇ましき

歌の帝徳安

東男を見給へと
手づから船の掃除して
見苦しきもの海に捨て
此所を拭へよ拂へよと
命惜まぬ顔を見て
此の末如何にならんかと
聲を限りに泣き叫ぶ
其の有様の哀れさは
阿鼻叫喚の生き地獄

斯る折りから海の面に
怪しき物を浮びける
見れば海豚の大魚
其の數總て二三百
鹽吹き立て群れ來る
餘りの事の不思議さに
陰陽の小博
安倍晴延を座に召て
如何なる事ぞと問ひければ

晴延易を披き見て
 扱て云へるやう此の海豚
 味方の方へ尾を向けて
 頭を敵に向くあらば
 源氏に危き事あらむ
 然れど船底通り抜け
 此方へ進むものならば
 味方に憑みあらぬなり
 つらく海豚の状見るに

味方の爲に吉ならず
 今は最後の外なしと
 主上を始め女院様
 二位の尼等を始めとし
 大臣、女房の身を思ひ
 瀧なす涙をハラクと
 膝に流して忍び泣き
 見るより多くの女官達
 堪へ堪へし悲しさの

涙の關は洪れ来て
 又もドツと泣き叫けぶ
 深き歎きの壇の浦
 乾かぬ袖は芭蕉葉の
 露とも見えて哀れなり

●二位尼

雨と飛び来る矢面に
 覺悟極めし二位殿は
 今を限りと見給ひて
 身に練色の二衣
 白の袴のそは高く
 御年僅か八歳の
 『帝』を懐き奉り
 帯にて確かと玉體を
 我が身に結び進らせつ

歌の帝徳安

三種の神器と仰ぎける
 其の寶劔を腰にさし
 神璽を昭に挟みつゝ
 早や艇に出で給ふ
 茲に『安徳天皇』は
 八ツの御年の程よりも
 萬の上に長け給ひ
 玉の御顔の美しく
 御髪は黒くふさやかに

御背に懸て給ひける
 御形こそ頼なし
 今しも尼に抱かれて
 御心如何に思召けん
 さもいぶかしき御氣色に
 いづこへ行と仰せける
 悲しけれ共二位殿は
 心に泣て堪へつゝ
 畏れ多くも兵共が

歌の帝徳安

矢をば御船に進らせて
 不敬の事を限りなし
 然れば此の船後として
 別の御船へ御幸をば
 仰き奉らん爲なりと
 最期の歌に『今ぞしる
 御裳濯河の流れには
 浪の下にも都あり』
 名残留めし其歌の

詞も未だ終らぬに
 身を躍らしてザンブリと
 恨も深き壇の浦
 底の藻屑と成り給ふ
 八條殿は是れを見て
 いでや我が身も御供と
 續いて海に入り給ふ
 餘りの事の悲しさに
 國母の君に御在します

歌の帝徳安

健禮門院扱は又た

安徳帝の御乳母

帥の典侍を始めとし

數多の女官女房達

船の艦舳に臥しまろび

互ひに身も世もあらばこそ

崩るゝ計りに泣き叫ぶ

哀れと云ふもおろかなり

無惨と云ふもおろかなり

悲しき聲は矢叫や

関に交りて遠近に

轟き渡る物凄さ

斯る中にも人々は

浮きも上らせ給ふかと

暫しが程は浪の間を

眺め奉りてありけれど

「帝」の君も二位殿も

八條殿も底深く

歌の帝徳安

沈み給ひて影もなし

あゝ何事ぞ何事ぞ

あはれ昨日の昔まで

一天四海の主上とし

殿を祝ふて長生に

門を不老と名けしも

今は雲井の龍下り

忽ちにして海中の

鱗と變り給ふこそ

悲しき事の極みなれ

つくづく思ひ廻らせば

花に喩へし十善の

御粧ひも今は早や

無常の風に匂ひ失せ

赫き渡る萬乗の

玉體浪に影もなく

沈みて御座す痛はしさ

無常元來定めなし

歌の帝徳安

有^い待^ま誰^{たれ}かは恃^たみある
 哀^{あは}れと云^いふも疎^{おろ}かなり
 女^{にょ}院^{わん}も今^{いま}は後^おれじと
 御^{おん}焼^{やき}石^{いし}と御^み硯^{すいり}も
 箱^{はこ}を左^さ右^{みぎ}の袖^{そで}に入^いれ
 其^{その}身^みを重^{おも}く重^{おも}らせて
 續^ついて海^{うみ}に入^いり玉^{たま}ふ
 平^{へい}家^けは今^{いま}や負^まけ戦^{いく}さ
 四^し途^と路^ろもどろの其^{その}中^{なか}を

勝^かち誇^{ほこ}りたる源^{げん}兵^{べい}の
 亂^{みだ}れて入^いるや船^{ふね}の中^{なか}
 其^{その}の振^{ふる}舞^{まひ}を睨^{にら}みける
 新^{しん}中^{ちゆう}納^な言^{ごん}知^と盛^{もり}は
 薙^{なぎ}刀^{なた}振^たりて戦^たへば
 我^われ後^おれじと能^の登^と守^{かみ}
 鬼^{おに}と呼^よばれし教^{のう}經^{けい}は
 源^{げん}氏^じの大^{だい}將^{しやう}義^ぎ經^{けい}を
 通^{のう}さじものゝ戦^たへど

歌の帝徳安

頼^た勢^い今^{いま}は非^ぜ行^ひもなく
 數^{あまた}多^たの敵^{てき}を斬^きり捨^すて
 共^{とも}に浪^{なみ}間^まへ沈^{しづ}み行^ゆく
 勇^{ゆう}士^しの末^{まつ}路^ろぞ哀^{あは}れなる
 斯^{かく}て平^{へい}家^けは壇^{だん}の浦^{うら}
 赤^{あか}間^ま關^{せき}に打^うち亡^{ほろ}び
 世^よは戦^{せん}國^{こく}の悲^{かな}しさに
 跡^{あと}吊^とふ人^{ひと}もなかりしが
 畏^{おそ}れ多^{おほ}しと後^{のち}の人^{ひと}

安^{あん}徳^{とく}帝^{てい}の御^み靈^{たま}をば
 筑^{ちく}後^ご久^く留^{りゅう}米^{めい}に奉^{ほう}じ來^きて
 『水^{すゐ}天^{てん}宮^{ぐう}』と奉^{たてまつ}り
 健^{けん}禮^{れい}門^{もん}院^{いん}、二^に位^ゐの尼^{あま}
 併^{あは}せて共^{とも}に祀^{まつ}りける
 由^ゆ來^{らい}の程^{ほど}ぞ畏^{かしこ}けれ (完)
 蟻^{かき}殻^{がら}町^{ちやう}の水^{すゐ}天^{てん}宮^{ぐう}は筑^{ちく}後^ご久^く留^{りゅう}
 米^{めい}の御^ご分^{ぶん}體^{たい}なり

淺草觀音隅田川譽の歌

● 黄金佛

鐘は上野か淺草と
音に名高き淺草寺
人の斷間も仲店の
朝な夕なの賑ひは

綠葉散史

最と有難き觀音の
利驗とこそは仰がれぬ
仰ぐも高し二王門
空に聳ゆる五重塔

隅田川譽の歌

丹碧輝く本堂の

其宏壯は東國に

二ツとあらぬ御寺なり

抑もや御寺の本尊と

仰ぎ奉れる御佛は

昔し昔の其の昔し

時は推古の大御代に

宮戸川より現れし

一寸八分の御尊體

黄金作り輝けり

斯て孝徳天皇の

大化九年に勝水の

上人茲に宇を建て

御像を祀り在りけるが

後に村上天皇の

御代も天徳三年に

慈善大師が巡り來て

更に御堂を擴めける

(2)

隅田川譽の歌

夫れより後は戰國の

亂れし時の悲しさは

屢々起る祝融の

火災に空しくなりけるが

今の伽藍は徳川の

葵の花も盛りなる

時の將軍家光が

名匠大家を撰びつゝ

建立なせるものにして

美術の粹を極めたる

其の結構は中々に

關東一と稱へられ

詣づる人は織る如く

都名所の一つたり

● 雨乞ひ

茲に一つの美談あり

(3)

隅田川譽の歌

抑も観音の利験にて
無量の加護を身に集め
花は櫻木人は武士
武士の譽れを末遠く
隅田の川と諸共に
美名を後に流しける
其人々を語らんか
頃は彌生の春過ぎて
卯花くだし月雨の

隅田川譽の歌

何處の人も人毎に
神に佛に雨請の
聲のみ家に満てける
◎ 又た意外
神に佛にさまぐに
祈りし甲斐か程もなく
そゝぎ出たる村雨は

如何にか爲けん彌生より
夏も中旬に成りたれど
雨さへ更に降らざれば
山田の稻はしをれはて
畑のものも枯れはて
秋の實りも如何にやと
世の人々の嘆く間に
早や秋風は吹き初めぬ
斯ては如何で世を経んと

實や黄金の露なりと
喜び祝ふ人々の
聲は何時しか頼みなき
神よ佛と怨みつゝ
暫時の程に世の中は
又も歎となりにけり
あゝ世の中は何故に
斯迄まゝにならざるか
此所も彼所も様々に

歌の譽川田隅

今日か今日かと晴る日を
待てど待とも晴やらで
早や一月になりしかば
何處の川も水増さり
土手は破れて橋落ちて
多くの家は流れしと
聞く度び毎に世の人は
安き心も更になく
かさ曇りたる大空を

唯恨めしと守るのみ

◎大洪水

逆巻く波の隅田川
今戸橋場は海となり
遂に堤の切れしより
家は見るく流されて
住居の人は時の間に

歌の譽川田隅

浮つ漂ふ有様に
知るも知らぬも夫々に
如何はせんと騒ぎ立ち
數多の小舟浮べつゝ
救ふとすれど救ひ得ず
見るく親は子に離れ
子は泣きながら親を呼び
果ては溺れて死する者
其の數更に知りざりき

◎將軍の出馬

時の將軍家光は
千代田の城の櫓にて
此の有様を見てけるが
餘りと云ひばあはれさに
いざ／＼然ばいざらば
自から行て人々に

歌の譽川田隅

力を添て救はんと
駒を進めて淺草の
川邊を指して馳せ行きぬ
駒を停めて見渡せば
思ひに勝る凄まじさ
棟よ柱よ橋の桁
矢よりも早く流れ来る
其の怖ろしき狀況は
悲惨と云ふてよかるべき

云ふも言葉はあらぬなり
將軍つくづく打眺め
聲曇らして云ひけるは
我れ將軍にありながら
多くの人の溺るゝを
如何で外に見らるべき
彼方の岸に走せ行て
其の有様を見て來れ
誰れか者共早く行け

歌の譽川田隅

早く早くと下知あれど
渦巻いて怖しく
瀧かと思ゆる水勢に
將軍麾下の人々も
互ひに顔を見合せて
我れ行べしと云ひ出る
者として更になかりしは
さもあるべきの事にこそ

將軍の叱聲

公は馬上に立ち上り
チツと臣下を見下して
云ひ甲斐もなき者共よ
よし川水は烈しとも
よし川浪は高しとも
源平二氏の戦ひに

歌の譽川田隅

はげしき宇治の流れをば
先き争ふて渡りける
佐々木梶原知らざるか
又た山崎の合戦に
遙か近江の湖水を
乗り渡したる左馬之介
明智の勇を知らざるか
行く者更に有ざれば
いでく行かん我れ行かん

さても甲斐なき者共と
叫びし聲も終らぬに
既に駒をば入んとす

●二騎の武者

氣色を變へて將軍は
二足三足乗り出しぬ
臣下の人驚きて

歌の譽川田隅

駒の手綱を控へつゝ
こは何事の御心を
此水勢をみそなはせ
宇治の流れも琵琶の湖も
此の烈しきに及ぶべき
もしも乗入れ給ひなば
貴とき御身も水の泡
曲げて許させ給はれと
言葉盡して諫むれど

將軍いかで止むべきぞ
再び聲を勵まして
否々放せ者共よ
戦争忘れて世の中の
治まり行に随ひて
武備を忘るゝ武士の
眠れる眼覺させん
『放せ』放さじ『放すべし』
君と臣との其の中に

歌の譽川田隅

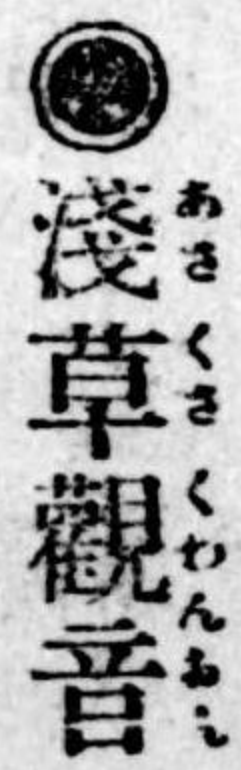
互ひに争ふ聲のうち
はるか彼方の水上に
漲る水を事とせず
逆巻く浪を物とせず
駒打ち入るゝ武者一騎
黒き立髪わかぬまで
かゝる白波鞭うちて
沈むと見れば又浮び
浮び、沈みつ様々に

進む姿の勇ましき
アレよ〜と聲の裡
將軍遙かに之を見て
彼の黒駒は誰なるぞ
乗たる武者は何者ぞ
あな勇ましと喜びの
詞のうち又一騎
波に色添ふ白駒を
徐かに進めて前に立つ

歌の譽川田隅

黒駒武者に聲かけて
進み行きける雄々しさに
扈従の人々打守り
あゝ勇しき振舞よ
夫れにつけても前に立つ
彼の黒駒は阿部豊後
後に續きし白駒は
抑も誰なるか何人か
扈従の聲を聞ながら

將軍馬を立直し
扱は彼の武者忠秋か
おゝ頼母敷心がけ
駒を隅田に乗入れて
最と美しき譽れをば
後の世迄も残しける



歌の譽川田隅

安部の豊後の忠秋は
 去年の秋の初めより
 あはれ家光將軍に
 勤氣を受し事ありて
 日々の出仕を勵めども
 將軍氣色只ならず
 其の面影を見るにつけ
 惜くもあらぬ此の命
 捨て死なんと思ひしも

忠義に篤き老臣の
 平田彈衛に留められ
 死ぬる命を長らへて
 事ある時に潔よく
 君の馬前に身を捨て
 心の底を示さんと
 豫て覺悟を爲たりき
 今日しも君に従ひて
 御傍近くにありけるが

歌の譽川田隅

駒乗り入れて彼方なる
 其の有様を見て来よと
 勵まし給ふ將軍の
 詞に此處と思ひ立ち
 平田彈衛を側近く
 招ぎて密と云ひけるは
 日頃語りし我が命
 捨てき秋は来りしぞ
 君の馬前に今日こそは

底の水屑と成り果む
 今はの際に思ひ置く
 事とて更にあらざれど
 心に掛るは年老ひし
 世にも一人の母君と
 未だ年行かぬ幼子の
 身の行末を頼むぞと
 言葉終りて又更に
 南の方に打ち向ひ

隅田川譽の歌

口に云はねど心には
南無や淺草觀世音
阿部の豊後の忠秋が
一世の願ひ願くは
隅田の流れ打ち渡り
向ふの岸へ着け給へ
もしも御許し無き時は
我が身も馬も諸共に
逆巻く浪に打ち沈め

返すくも淺猿しき
死骸を人に見せぬやう
遠くの海へ流してと
暫し瞑目したりしが
さても不思議や觀音の
護らせ給ふ御驗か
何處ともなく金色の
光りは胸に入りてける
さらばと計り忠秋は

隅田川譽の歌

駒に一打ち鞭打ちて
ザンブと計り隅田川
寄る白浪事とせず
浮つ沈みて泳ぎ行く
平田彈衛は之を見て
今は主人の大事なり
主君の浮沈を外に見て
我れのみ此處に在るべきぞ
などか後れん後れじと

身は白駒に打ち乗りて
續て渡る浪の上
見れば見る程怖しき
さしも烈しき水勢も
此の真心に恙なく
向ひの岸に打上り
傍へに立る大石に
駒を留めて停すめば
此方の岸の人々は

斯の有様に手を拍て

あな勇ましき武者振と

聲を限りに叫びしは

如何に目出度き事ならん

◎武士の譽れ

人の此の世は波高し

人の此の世は風烈し

其の波風を忍びてぞ

人と此の世に云はるなり

見よや二人の武士が

世にも稀なる武者振に

將軍深く喜びて

あはれ勇し事もなく

彼方の岸に着たるぞ

然はさりながら戻りには

人馬共々疲るべし

もしや浪間に沈みなば

云ふも甲斐なき悔なるぞ

あたら勇士の失ぬよう

小舟をやりて助けよや

とく／＼漕げよ漕べしと

又もはげしき將軍の

詞に舟を進むれを

渦巻く水にさへられ

彼方此方に漂ひて

今は梶さへ儘ならで

心に逸る計りなり

◎身の光榮

彼方の岸に着たりし

阿部の豊後と彈衛との

二人の主従は此所彼處

其の水害の有様を

隅田川響の歌

駒の上より見渡して

細かに調べ渡れば

然ば戻りて此の様を

聞え上べしさりながら

馬は疲れて又た元に

歸らん事の難けぬと

豫て捨たる命なり

いざ／＼共に行べしと

二つの駒を促して

亦も乗り切る隅田川

逆巻く浪を遙々と

川の中途へ漕き出ぬ

眺めし人は口々に

あれよ／＼と云ひながら

危ぶみつゝも如何にぞと

守る間もなく二騎の武者

何の障りもあらばこそ

最と勇ましく着にけり

隅田川響の歌

喜び勇む將軍は

嬉しき事の限りなく

先々來れ此方へと

二人を召せば忠秋は

心の裡に思ふやう

勘氣にふれし身にあれば

凡て控へてあるべきに

許も受ず先立ちて

自ら川を渡りたる

御咎め受るものならん

身を慎みて静々と

御前に近く畏る

雨か霰れか將た風か

更に勘氣を受けたなら

今は御前に潔よく

腹かき切つて果なんと

覺悟極めてありけるに

斯る氣色は更になく

隅田川譽の歌

將軍笑みを含みつゝ

豊後を近く座に招ぎ

詞優しく宣給はく

よくぞ行たり阿部豊後

見よや戦ひ收まりて

諸國の武士は皆共に

世の泰平に馴れくゝて

華奢風流を學べども

武備の嗜み更になく

斯る場合に臨みても

僅かの水を恐れては

大和御國の武士と

如何でか争で言るべき

から汝は勇しく

命を捨て行たるは

武事を忘ぬ心がけ

後の世迄の鑑ぞ」と

直ちに給ふ五萬石

隅田川譽の歌

今も常盤の松蔭に

駒とめ石の名も高く

守らせ給ふ觀音の

光りは世々に輝きぬ

*
*
*
*
*
*

隅田川譽の歌終

浪武男と子不如歸の歌

●伊香保山

長閑に霞む春の野に
遙かに流るゝ阪東や
近く聳ゆる榛名山
飽かの景色を眺めつゝ

綠葉散史

閑つ語りつ樂し氣に
長き日足も短かしと
笑ふ男女は何人ぞ
一人は川島武男にて

不 如 歸 の 歌

一人は妻の浪子なり
或日二人は連立ちて
近き野山に蕨狩り
姥のお幾も嬉し氣に
宿の女中を供として
徐かに後より續きける
應て伊香保を後にして
其名も清き水澤の
観音堂の後ろより

山の中央に来て見れば
下は赤城の麓より
遠く緑の平原を
手に取る如く見晴して
繪を見るやうな心地よき
足元近く眺むれば
芽出づる草の種々に
此處や彼處に咲き匂ふ
千種の花も愛らしく

不 如 歸 の 歌

心も暢る樂しさに
浪子は深く興に入り
謠ふ唱歌の節さへも
最と面白く聞ゆるに
姥は嬉しさ堪へ難く
お久し振のお唱歌ぞと
眞の愛の現はれて
實に頼母しく見えにける
應て女中と共に

彼方を指して蕨狩り
武男は後を見送りて
扱も建氣な姥ぞと
浪子を自己が膝近く
遙かの方を指して
浪さん彼れを見給へよ
左りに見ゆる白壁の
翻々するは澁川で
向ふに碧く細長く

歌の歸如不

リボンの如に流るゝは
利根の川水其先は
赤城、妙義の山續き
扱ても美事な景色ぞと
最と睦まじき夫婦仲
浪子は心に嬉しとて
武男の膝に手を掛けて
あゝ何時迄も斯ふしてと
語る後ろの木蔭より

帽子被りし影一ツ
武男は誰と打ち見れば
之ぞ従兄の千々岩なり
彼れは陸軍中尉にて
軍服姿殿めしく
顔色さへも白ふして
左も優しげに見ゆれども
心の黒き漢なれば
素行兎角修まらず

歌の歸如不

曾て浪子に懸想して
思ひの丈けを細々と
書て送りし事ありき
あゝ抑も彼は何故に
何しに茲に來りしぞ
浪子も姥も驚けり
斯りし事のあらんとは
知らぬ武男は悦びて
最と嬉氣に勇み立ち

好こそ來りし千々岩君
僕は女軍に攻められて
採りし蕨の彼れ是れと
争ふ事も負け軍
君の加勢の來るからは
女軍も今は何のその
愛嬌餘る戯れ言に
互ひに笑ふ目出度さよ
頓てお幾は夕食の

歌の歸如不

仕度せんとして急ぎつゝ、
 女中と共に歸りける
 後に武男と浪子嬢
 千々岩を入れて三人は
 暫し野山に蕨狩り
 いざや宿屋に歸らんと
 元來し道へ出行けば
 夕日は何時かキラ／＼と
 物聞山の彼方より

空ら金色に輝きて
 野山の草は一入に
 萌黄の色を勝りける

●千々岩の野心

口に云はねせ心には
 毛虫の如に嫌はれし
 千々岩は武男と並び立ち

歌の歸如不

浪子は後ろに従へり
 人の往き來も山道の
 物は静かに只だ聞は
 草苺る童に曳れ行く
 牛の聲のみ哀れなり
 三人は徐かに歩みつゝ
 壑を涉りて又坂に
 上る武男は立寄り
 膝打ちながら語るやう

忘れて來たよステツキを
 直ぐに取り來る夫れ迄は
 少時待たれよ千々岩君
 早く戻るよ浪さんと
 無理に浪子を止め置て
 彼方を指して驅け出しぬ
 後に武男の去りてより
 浪子は一人力なく
 千々岩の右に立けるが

不 如 歸 の 歌

機會こそ好けれ此時と
千々岩は浪子に打向ひ
扱々浮世は金ですよ
金と爵位があるならば
譬へ男は間拔でも
直とお嫁に行くなれど
金と爵位の無い者は
生命を掛けて慕ふても
唾さへ掛けぬお利巧さ

是が當世の御姫さま
然は去りながら御身には
斯る心は無からんと
他所に事寄せたれとなく
叶はぬ戀の恨みごと
聞に堪へざる言の葉に
流石浪子も黙し得ず
屹度千々岩を睨まへて
氣を注なさい千々岩さん

不 如 歸 の 歌

武男の前に今一度
言ふて見られよ其言葉
夫れ程心があるならば
何故か貴君は其以前に
我が父上に相談へて
御身の心を云はざりし
忿る浪子の氣色見て
千々岩も顔の色變ぬ
時に彼方にギシ／＼と

靴の音高く響かせて
洋杖片手に振りながら
驅け來る者は武男なり
失敬と軽く云ひながら
チラと浪子の顔を見て
浪さん如何かしたのかと
尋ぬる詞の尾に次て
千々岩は口も軽やかに
君の戻りの遅ければ

夫れを案じて斯ふなりと

俄かに作る高笑ひ

再び三人は連れ立て

伊香保の宿へ歸りける

● 返子の海岸

都の春は遅けれど

返子の野山は早既に

見渡す限り山櫻

咲て亂れし白雲の

卯月初めの土曜日に

朝より降れる春雨は

海も野山も一色に

烟りの如く罩めて

只さへ永き春の日は

果しもあらぬ心地あり

日暮方より又た更に

雨に風さへ加りて

雨戸鳴る音物凄く

怒りて哮る相模灘

萬馬狂ふか濤の聲

濤に馴れたる村人も

只だ怖ろしく戸を閉ぢぬ

斯る風雨を事とせず

浪子の病を訪れし

川島武男は別荘の

一と間の中に對座ひ

浪子が挿せる櫻花

最と樂しげに見てけるが

浪子は側に指折りて

言葉優しく語るやう

昨日や今日と思ひしも

早や一年となりにけり

思ひ起せば祝の日

彼の時馬車に打乗りて

不 如 歸 之 歌

燃ゆる思ひに赤坂の
溜池橋を渡りつゝ
三五の月を浴びながら
山王坂を上りしに
今を盛りの櫻花
涼しき風に送られて
馬車の窓より翻々と
吹雪の如く入りけるが
後に馬車より下る時

鬚に停まりし花瓣を
伯母が氣付て取り呉し
其面影のありくくと
未だ眼の前にあるなりと
語るを聞て莞爾かに
武男は浪子の顔覗き
まあ一と年は夢の間よ
水の流れと人の身の
早き月日の其中に

不 如 歸 之 歌

彼是れすると又直ぐに
銀婚式となりぬべし
而し彼の時浪さんが
お澄し方のお可笑さと
笑ふ武男の袖引いて
だつて貴郎も彼の時は
若殿様のお澄しさ
盃持つは持たれど
夢の如だと語るのを

側に聞き居し姥の幾
扱て面白のお話しや
ホンニ去年の蕨狩り
伊香保に遊ぶ心地すと
果は互ひに興深く
浪子は病も忘れ顔
武男は浪子を慰めて
最早時節も好き故に
浪さん早く快くなりて

又も伊香保に遊ふよ
武男は浪子を慰めて
横須賀さして出行きの

浪子の手紙

今日か明日かと指折りて
數ふる月日は最と長く
戀しと思ふ折からに

過る七月十五日

其名も馨る香港に

認め給へる温き文

最と懐かしくなつかしく

讀みては返し幾度か

嬉しく讀て候かしく

烈しき暑さに御障も

何の恙も御在さぬは

目出度き事の限りなり

扱て此方なる母様は
心地勝れて御在すれば
御心安く思召せ
夫れに付ても妾の身
日毎々の朝な夕
淋しく過し候も
御留守大事と守りつゝ
母上様の御機嫌を
害ねぬ様に只管に

心を注げて候ふも

不束ぬ者の悲しさは

失策る事の多くして

最と困りて候得ば

唯御歸りの早ふして

無事な御顔を見る事の

嬉し樂しに日を送り

雨降る夕べ風の夜半

一人り思ひに焦れては

淋し悲しさを遣る瀬なく
 此の身に翼あるならば
 空ら飛ぶ鳥の其れならで
 御側近くに駆け行きて
 積る思ひを語り度く
 日毎々に御寫眞と
 世界の地圖を打ち眺め
 今日は何れに居玉ふぞ
 明日は何處にお座らむ

風雨の障り無きやうに
 萬の神や御佛に
 願ひとらゝ得へば
 何卒妾の身を察し
 御身體大切に一日も
 早く御歸り遊ばせと
 文字さへ細る筆の跡
 焦るゝ心は如何ならむ
 末は血に啼くはとゝぎす

● 逗子の別れ
 遠洋航海終て後ち
 武男は妻を見舞んと
 都の母を慰めて
 應ては來る逗子の里
 日は何時しかに暮れはてゝ
 軍見の山の彼方なる

薄紫の雲間より
 チラリと見ゆる月影に
 野川の橋を打ち渡り
 白き砂路を一筋に
 暗き林に別け入れば
 仄かに聞ゆる爪音は
 誰れを待つらん想夫憐
 噫々々琴の調べかと
 思へば心も千切るなり

不 知 歸 の 歌

離別せよとの母の言
如何で云はれん云はるべき
然あらぬ體に入り行けば
浪子は武男の顔を見て
沈み勝なる面影に
若や障りはあらぬかと
尋ぬる聲を打消して
心の裡に泣きたりき
斯て二人は對度ひ

夕餉の食に就たれど
武男は兎角進み得ず
折から迫る終列車
時刻も最早あらざれば
今は已ねなく立ち上り
直ぐに歸るよ浪さんと
確と浪子の手を把れば
浪子は聲も優しげに
早く歸つて頂戴な

不 知 歸 の 歌

切なる聲に送られて
又も彼方を振り向けば
浪子は白きハンケチを
打ち振りながらねへ良人
早く歸つて頂戴な
早く歸つて頂戴と
三度び叫びし其聲は
武男の耳に響きける
二人の心は如何ならむ

武男が留守の其後に
武男の母は情なくも
哀れ浪子を離別せり
浪子は悲しさ遣る瀬なく
一度び死なんとしたりしが
一人の老婆に助けられ
惜くもあらぬ命をば

浮世の儘に任せける

●佐世保病院

彼の黄海の激戦に

川島武男は傷つきて

今は佐世保の赤十字

或日武男は只一人

降り来る雨の淋しさに

庭の景色を眺めつゝ

戦地を想ふ折りからに

届く荷物の一と包み

其の名の人は知らねども

吾が名を書ける筆の跡

文字はありく浪子嬢

色みを解けば中なるは

哀れ病をつとめつゝ

縫る衣の針毎に

心籠たる数の品

手に取り上げて眼に涙

あゝ浪さんよ浪さんと

武男は暫し男泣き

●汽車の別れ

日清戦争終て後ち

浪子の父の中將は

浪子を連れて京廻り

供は姥のお幾なり

斯て三人は山科の

プラットホームに現れて

東行列車に乗り込みぬ

折から武男は臺灣へ

下りの汽車にありけるが

西と東に行き違がふ

汽車と汽車との擡れ違ひ

此方は川島武男にて

不 如 歸 之 歌

彼方は片岡浪子なり

良人と叫ぶ一と聲に

お、浪さんと答へつゝ

二度と逢れぬ流車の裡

浪子が投げし白巾を

手に取りながら別れ行く

● 青山墓地

在青山の墳墓に

武男は涙を拭ひつゝ

浪子の墓と認めし

墓標の下に佇みて

自から持てる白菊の

花の一枝優しくも

手向て其所にひざまづき

妻の浪子が送りける

紀念の文を取り出し

涙ながらに見てけるが

不 如 歸 之 歌

折しも後に聲ありて

アレ川島の兄さんと

小兒の呼ぶに振り向けば

浪子の父の中將が

墓参の爲に立るなり

閣下と呼べば中將は

確乎と武男の手を握り

武さん私も辛かつた

譬へ浪子は死ぬるとも

私は卿の爺ちやぞと

武男の肩を撫でながら

熱き涙をハラ〜と

暫し無言にありけるが

喃、武さんよ久々に

嚙面白き臺灣の

話を聞かせて頂戴な

不如歸の歌終

阿新丸の歌

緑葉散史

孝子の旅

都の空は春なれど
我が身一つは秋の日の
曇り勝なる胸の裡
誰れに語らん母上に

許しを受けて廻々と
父君居ます佐渡ヶ島
よしや我身を捨るとも
父上様の御最期を

阿新丸の歌

いかでか他所に見らるべき
母上許し給へよと
語るを聞てハラ／＼と
母は涙に袖しぼり
ヤヨ阿新よ阿新よ
汝は未だ十三の
西も東も鞍馬山
比叡の先さへ知らぬ身の
海山越えて一百里

阿新丸の歌

阿新丸は母上の
許しを受けて勇み立ち
旅の用意もいそ／＼と
菅の小笠を傾けて
履も習はぬ草鞋に
小さき足を固めつゝ
露踏み分くる越の旅
朝の雨に降られては
夕べの風に吹かれつゝ

罪科人の其の外は
鳥も通はぬ佐渡ヶ島
年齒も行ぬ一人子を
遠き旅路へ送るのは
覺束なさと可愛さの
心交々往き來して
後ろ姿の見ゆるまで
門邊に出て見送りつ
深くも嘆かせ給ひける』

見るも哀れの其の姿
一人の供を従へて
我が父上を尋ねんと
佐渡ヶ島根に下り行く
孝子の心を勇しき

◎佐渡ヶ島

隙行く駒の足早く

阿新丸の歌

阿新、都を出しより
十日餘りの日も経ちて
越路の旅の敦賀なる
其の港へと着にける
茲より船に打ち乗りて
海原遠く北の空
豫て覺悟はしたれども
旅と云ふ事訓れざりし
年齒も行かぬ少年の

其の心には流石にも
山路の嶮も恐ろしく
野原の道も淋しくて
いとも悲しと思ひしを
波風荒き海上に
初めて出し事なれば
憂と辛さは如何ならむ
波なき朝は父を戀ひ
風ある夜半は母を戀ひ

阿新丸の歌

心は常に父母の
西と東に別れつゝ
悲しみけるぞ哀れなる
斯て波路を行く程に
躰ては島に着にける
去れど島にも誰れ一人
頼る人としてあらざれば
阿新丸は是非もなく
本間の邸尋ねつゝ

其の門前に佇むを
折から來るお寺様
顔をつくぐ打ち眺め
其所に佇み給ふには
何か御用におはすかと
言葉優しく尋ねれば
阿新丸の云へるよう
我は此の地に流されし
日野資朝の一子なる

阿新丸の歌

阿新丸と申すもの
今しも此地に來りしは
父資朝が近き内
斬られ給ふに決しぬと
人の噂に聞きしかば
責ては父の御最期の
其有様を見んものと
都を出て遙々と
此處迄尋ね來れりと

言葉も來だ了らぬに
涙は早くハラ／＼と
頬に傳ふて流れける
僧も此の様打ち見やり
流石憐れに思ひけん
旅の勞れをいたはりて
持佛堂へと伴ひつ
心の限り慰めぬ
雄々しと雖と未だ若き

阿新丸の歌

稚な心の阿新は
只に嬉しく有難く
思ふに付けて只管に
父上君に片時も
早く逢たや見たしとて
此の由僧に願ひしに
心易くも承知して
表の方へ行きけるが
後に残りし阿新の

孝子の夢は如何ならん
思へばいと哀れなり

● 無念の涙

旅は道伴れ世は情け
袖摺り合ふも縁とかや
情けに深き彼の僧は
翌る日一人仕度して

阿新丸の歌

本間の許へ尋ね行き
阿新丸が身の願ひ
遂一其所に打ち明けて
哀れの状を物語り
其の許しをば乞ひけるに
思ひも寄らぬ入道は
首を左右に打ち振りて
事申中々に聞き入れず
聲さへ荒く曰ひけるは

今日か明日にか斬るべき
其の罪人に逢んとは
以ての外のことぞかし
只々夫れのみか此の事の
若し關東に聞えなば
執權殿の御怒りは
抑や如何になり行くぞ
去れば此の事何しても
許し誰しと言ひ放つ

阿新丸の歌

あゝ何事ぞ何事ぞ
其のすげなきは狼か
虎の心にさも似たり
思ひ廻せば憐れなる
世の中知らぬ少年の
孝と愛とに驅られつゝ
海山越えて遙々と
母に別れて來しものを
只だ一目だに其の父に

逢ふ事だにも許さぬは
餘りと云へば面憎し
僧も意外に驚きて
不憫の事と思へども
夫れさへ今は是非もなく
何處立ち出て阿新の
宿れる方を訪ぬれば
阿新丸は僧を見て
今こそ父に逢るか

阿新丸の歌

心の裡に喜びて

其の嬉しさは限りなく

様子如何にと問ければ

僧は泣く々入道の

無情の事を打ち語り

所詮叶はぬよし迄も

残らず明し告にける

阿新之れを聞くや否な

其の悲しさと怨めしさ

何に例へんよしもなく

無念の涙は雨あられ

父の最期

斯くて元徳三年の

五月中旬も過し頃

憎や本間は阿新に

何の知らせもあらばこそ

阿新丸の歌

資朝卿を獄舎より

出し奉りて久々に

沐浴の事を進めける

資朝卿は之を見て

最早我身の斬らるべき

時の来るを悟りつゝ

徐ろに思ふ我が子なる

阿新丸の偲ばれて

あゝ何故ぞ何故ぞ

何故なればつれなきぞ

己が最後を見んために

遙々此處へ來しものを

一目をだにも見せもせで

果ぬる事の口惜とて

聽て河原へ引かれつゝ

辭世の詩を書き残し

無慚や斬られ給ひしは

聞くも涙の種なりき

●少年の讐討

憎しと思ふ父の敵
討つて恨をばらさばや
罪科あらぬ我が父を
及の露となし果し
讐は取りぬ父君を
失ひたりし仇は今

討て捨てばや討得ばや
無き父上よ聞し召せ
父に逢べき爲なれば
厭ひはせねど様々の
苦しき事を重ねつゝ
海山遙か越來しに
罪人なりと情けなや
逢ひ見ん事を許されず
父の座し在す處ぞと

聞き得し方を眺むれば
松杉深く生ひ茂り
高き塀をば二重三重
打ち廻らせし其奥の
牢屋の中に居ますとよ
吁々吁々戀し我が父に
一目だにも只管に
乞へど頼めど甲斐もなく
嘆きの中に果敢なくも

今は此の世に居まさぬと
聞きにし時の悲しさは
●敵は何處
やよ父君よ亡き父よ
いでや讐を討たんとて
敵の臥床に忍び入り
枕蹴上げて打ち起し

歌の丸新阿

驚き起つを一太刀に
肩先深く斬りてける
其時叫ぶ彼れの聲
聲を知るべに来る人に
見附けられじと阿新は
竹の林に隠れしを
驚き騒ぐ者共は
小供の行方を求めける
何處を見ても阿新の

見えぬに彼れは呆れつゝ
松明高く振り照し
此處よ彼處と求めける
多勢の敵に向ひなば
遁る方なき阿新の
父の敵を討ち取りて
望みは足りぬ今は唯
敵の寄せ來ん其の前に
人手に掛らぬ其先に

歌の丸新阿

よしや處は變るとも
無き父上と諸共に
佐渡の小島に此の命
捨るは更に惜まねど
心残りは只一ツ
都に居ます母の事
無理に寝を願ひつゝ
旅路遙かに海山を
越えて來りし其後は

我を如何にと朝夕に
此方の空を眺めては
案じますらん我が上を
思ひますらん我が事を
若し障りなく望み遂げ
歸り來る日のあらんかと
幾度となく門に出て
待ち給ふらん嘸や嘸
嬉しき便のあらんかと

待ち給ふらん嘸や嘸

あゝ我れながら何故に

果敢なき思ひに沈みけん

甲斐なき歎に沈みしぞ

戀しからぬにあらねども

女々敷かりけり我ながら

心定めて、いざ去らば

敵の目先にふれざるは

亡き父君の大御魂

守りますらん我が上を

天つ御神も我が上を

護らせ賜ふことなるか

●神の手引き

宵の雨風晴れ行きて

遁れ出るに便りよし

神の守りを他所にして

神の助けを他所にして

命捨んと思ひしは

浅ましかりし事なりき

國の爲なり家の爲め

君に心を盡してぞ

世にある甲斐の有るなるを

茲に空しく成もせば

何の甲斐かはあるべきぞ

國の爲なり家のため

生き長らへて亡き父の

忠義の心受け繼て

朝廷に叛き奉つる

逆賊輩を亡さば

亡き父君の手向には

是に勝れる孝あらし

此所に死せしと思ひつゝ

今より後は我が命

無きものにして國の爲め

阿新丸の歌

只一筋に真心を
我が大君に盡しなば
見ぞ思義と云ふべけれ
去ば此處をば遁れ出て
忠と孝とに勉めなん
然は去りながら何處より
遁れ出べき此の道を
行かば忽ち捕はれん
其處よ此處よと見渡せば

後は最も深くして
底さへ知れぬ堀ぞかし
若し浅からば渡らん
若し狭からば飛び越ん
外には出る方ぞなし
あゝ如何せん如何せん
天津御神よ父上よ
救はせ賜へ阿新を
憐れみ給へ阿新を

阿新丸の歌

敵に知られず覺られず
身は恙なく佐渡ゲ島
遁れ出べきよき道を
教へ給へよ好き道を
思ひ附たりよき事を
彼方に見ゆる藪の中
生い繁りたるなよ竹の
向ふの岸に靡けるは
我れを助けん爲にとて

靡きけるなり我が爲に
天津御神と我父の
我れを助けて此の橋を
渡し給ふか好き道を
我に教て給ひける
其身は軽しさらくと
竹に登りて恙なく
向ふの岸へ着けるは
夢か現かあな嬉し

阿新丸の歌

喜び勇む阿新は
星の光りを便りつゝ
湊の方へ急ぎける

◎ 目出度き歸京

月影暗き眞夜中に
聞も怖し佐渡グ島
虎口を遁れ阿新は

阿新丸の歌

語るを聞いて山伏は
如何に憐れと思ひけむ
去らばお助け申さんと
阿新丸を肩にして
湊をさして急ぎける
懸て湊に着ぬれば
折から一つの船もなく
只遙かなる沖合に
波路分け行く船ありき

暗を走りて行く程に
年いと老し山伏の
一人のものに行き合ひ

彼れ山伏は阿新を

打ち毟めつゝ云ひけるは

可愛き稚兒、御身には

何れを指て行き給ふ

問へば答へも阿新は

夕べの事を包まずに

彼れ山伏は聲上げて
其船寄せて給はれよ

便船頼み申さんと

呼べば船をば漕き寄せぬ

二人は船に打ち乗れば

再び遠く沖の方

斯る所に敵のもの

追手の数は百餘人

馬を飛して馳せ來り

阿新丸の歌

駒を淺頼に乗入れて

其船返せ戻せよと

呼べど叫べど船子等は

更に見向もなさずして

風のまに／＼に漕ぎ行くは

心地よき事限りなし

馳て其日の夕暮に

越の港へ着ければ

彼の山伏と別れつゝ

又も山路を遙々と

都を指して三百里

我家に歸り母上に

語るも辛し父上の

佐渡ダ鳥根の御最期や

怨みの白刃酬ひてし

其の有様を細々と

話しは盡し秋の夜

悲しき中に樂みは

阿新丸の歌

君へ忠義の志

父に劣らぬ忠勇の

譽れも高し後の世に

歴史を飾る日野の君

資高卿と謠はれて

忠と孝との教草

實に武士道の鏡鑑なり

あゝ悦ばしあゝ嬉し

阿新丸の歌終

歌の光義上村

勤王 烈士 村上義光の歌

●吉野山

縁りも深き松原の

松の木の間まに身みを寄よせて

山路遙はるかに見み上あれば

高峯たかねに續つく白旗しろはたは

緑葉散史

深山嵐みやまのろしに打うち靡なき

麓ふもとを守まもる兵士つはらのの

兜かぶとの星ほはきらめきて

寄せ來よる敵てきを防ふせぐなる

歌の光義上村

其の光景の雄々しきに
 築し城は遙く〜と
 雲井に高く聳えたり
 頃は延元三年の
 二月半ばの事なりき
 未だ雪深きみ吉野の
 吉野の山の奥深く
 籠り給へる大塔の

歌の光義上村

道細くして谷深く
 其れのみならず忠勇の
 心抱きて山道の
 便り詳しき官軍に
 いかで勝べき勝るべき
 十日餘りの戦争ひに
 討れし者は數知れず
 多勢を頼む賊軍も

宮を攻んと畏くも
 押寄せ来る賊兵は
 北條方にさる者と
 聞えし出羽の入道が
 卒る來れる數萬騎
 早や矢戦争の始りて
 麓近くに寄すれども
 城のあたりは殊更に

此の有様に驚きて
 暫時ひるみてある程に
 城の手引に雇ひたる
 岩菊丸は打ち出て
 斯く徒らに日を経るは
 扱も甲斐なき事ぞかし
 つく〜見るに大手より
 攻れば味方傷つきて

歌の光義上村

いかでか破る時あらん

思ふに城の後ろなる

金峯山には嶮しきを

頼みて守る敵あらじ

物に慣れたる味方をば

夜のまぎれに忍ばせて

東雲つぐる其頃に

関の聲をば上げよかし

聲に驚く敵兵を

大手搦手押寄せて

攻め破らんと言ひ出でぬ

斯と聞きたる賊軍は

深く喜びさらばとて

殊に優れし兵卒を

金峯山へと進めける

危き岩根傳ひつゝ

(4)

歌の光義上村

谷を廻りて行き見れば

案の如くに官軍は

嶮しき山と頼みつゝ

梢に高く結ひ付けし

旗のみ風にひらめきて

防がん兵もなかりけり

* * * * *

落城

足利方の伏兵は

心の儘に忍び入り

繁る木陰や岩陰に

弓矢を伏せてはのゝくと

夜の明け行くを待つ程に

早や東雲の明け鳥

(5)

歌の光義上村

相圖あひづの時に成りたれば

大手おほての兵へいの五萬餘騎まんよき

右みぎと左ひだりりに押寄せて

只々ただ一ひとと揉みと攻上る

元氣げんき付たる足利あしかがの

賊ぞくの有様見下して

容易よういならずとみよし野の

吉野よしのの勇士ゆうし五百人にん

命いのち惜おしまず攻め口を

守りて敵を追ひ下す

斯かる折かりから搦手に

廻りし賊ぞくの一ひとと群むれは

此處こゝに彼處かしこに火を掛けて

関とぎの聲こゑをぞ揚あげにける

さしもに猛たけき忠勇ちゆうゆうも

前後ぜんごの敵ふせを防まぎかね

歌の光義上村

殊ことに火勢くわせいの強つよければ

敵てきに引ひき組み刺違さしちがひ

或あるは猛火もうくわに飛とび入りて

思おもひの討死うちじに

深ふかき大手おほての堀ほり一重ひとへ

空ひなしき骸からに埋うづもれぬ

勝かつに乗じやうじて賊兵ぞくへいは

猶なほも進すすみて大塔おほとつの

宮みやの籠こりておはします

藏王堂ざわうだうへと打うちかゝる

宮みやも今いまはと思しめし

討うち出給いでたまふ有様ありさまは

上のる朝日あさひに輝かがきて

赤地錦あかぢにしきの直垂ひたれに

鎧よろいの袖そでのきらりと

其御姿そのみすの勇いさましさ

歌の光義上村

◎大塔宮

忠勇共にならびなき

勇士の數の二十人

宮の左右に従ひて

雲霞の如く進みくる

敵の真中に打ち入りて

彼方是方と斬り立る

寄手の數は多けれど

真心籠めし人々の

及に如何で向ふべき

四方の谷間にさつと引く

其の間に宮は逸早く

藏王堂へと歸りまし

歌の光義上村

今は防がん術もなし

年頃よくも仕へしよ

いでや最後の酒宴せん

いざ人々と大庭に

立せ給へる御姿を

見れば七筋の矢は立ちぬ

頬のあたりも傷つきて

流るゝ血汐おびたりし

◎陣中の劍舞

御心猛き宮なれば

流るゝ血をも傷手をも

更に物とも思されず

常に變らぬ御氣色に

大盃を三度まで

打傾けてましますせば

歌の光義上村

木寺の相摸大太刀に

敵の首を刺し貫ぎて

宮の御前にかしこまり

聲勇ましく謠出す

『戈鋌劔戟を降す事電光の

如くなり

磐石岩を飛す事春の雨に

相同じ

然りとは雖ども天帝の身

には近づか

修羅彼れが爲めに破ら

る』

(-10)

はやしを擧て謠ひつゝ

劔を左右に打振りて

歌の光義上村

大和男兒の勇しく

舞たる様そ雄々しけれ

●村上義光

生死の境も打ち忘れ

心養ふ其ひまに

大手の戦ひ今はしも

いと烈しく成り來り

入り交りたる閑の聲

其の折りからに入り來る

村上義光口惜げに

城の彼方を打睨み

聲も震て無念顔

一二の城戸は敵の爲め

(11)

歌の光義上村

討破られて今は早や

防がんにやうもなく成ぬ

敵の大軍來ぬ隙に

物の大事に成らぬ間に

何處にもあれ切り破り

宮には早く落給へ

* * * * *

●大和魂

我れ御跡に留まりて

いとも畏き事なれど

召させ給へる御鑑

錦の直垂給はりて

御名を冒し御命に

代りまつらんいざ〜と

歌の光義上村

申す 宮は聞ずして

言葉優しく仰せらく

あゝ義光よくよ

忠義にあつき心ざし

喜ばしとは思へども

我れも俱々世を去らん

聲荒らげて義光は

言ひ甲斐もなき御詞

大事の御身と思さずや

早やとく〜と上帯を

解かせ給へと急き立てば

實にもと思し宮も又た

御手を帯に掛け給へ

やよ義光よ義光よ

汝の恩は忘れじと

涙ながらに宣給へば

忠義に厚き大和武士

武士の鑑みの義光は

直ぐと鎧を脱ぎ替へて

二の大城戸にかけ上り

宮の御姿幽かにも

遠く成り行く様を見て

時刻はよしと聲高く

名乗り上げつゝ大塔の

宮の最後を見よやとて

群がる敵を切りなびけ

猛火の中に飛び入りて

清き最期を遂にける

されば忠義の名は今も

あはれ千歳に傳はりて

譽れも高き吉野山

櫻の花と競ふなり』

宮の面影

抑も大塔の宮様は

後醍醐帝の三の皇子

出家の身にて御座せども

父の御爲め國のため

義兵を擧げて逆臣を

征伐せんと計られし

其の企ての何時しかに

逆賊輩に洩れしかば

俄かに其れと心づき

四方の備へも厳しくて

比叡の奥にも南都にも

身を置き給ふ事かたぐ

熊野を指して落ち給ふ

股肱の人は何人ぞ

歌の光義上村

赤松律師首めとし

木寺の相模三河坊

片岡八郎武藏坊

平賀三郎之に次ぎ

矢田の彦七其外に

村上義光加はりて

同勢九人淋しくも

柿の衣に笈を負ひ

頭巾目深に打ち被り

先達作り山伏の

熊野詣りに装へたり

あゝ龍闕に人と爲り

辛き思ひも仕給はぬ

雲上人の御足にて

長途の徒歩の如何にやと

供人共の案じける

歌の光義上村

思ひに代へて安々と

社ろくの御祈り

宿りくの御勤め

露も怠り給はぬは

修業を積める山伏も

見答むるもの更になし

由良の港を見渡せば

沖漕ぐ船の楫を立つ

浦の濱沙渺々と

知らぬ浪路に鳴く千鳥

紀路の山の幾重にも

薄紫や藤代の

松に掛れる磯の浪

和歌吹上の浦かけて

月に磨ける玉津島

光りを他所に伏し拜み

歌の光義上村

長汀曲浦の旅の道

心を碎く習ひなり

雨を含める孤村の樹

夕べを送る寺の鐘

哀れ催す黄昏れに

切目の王子に着玉ひ

叢祠に袖を片しきて

朝家の榮を祈ます

斯て宮には十津川の

戸野の竹原たよもつゝ

暫時隠れて居給へど

爰にも長く在しかね

高野の方へと落ち給ふ

茲に芋賀瀬庄司とて

賊に一味の士の

宮を支へて申すやう

歌の光義上村

此の道通し申しなば

鎌倉よりぞ罪あらん

されども宮に弓引くは

如何にも恐れ多ければ

錦の御旗賜るか

左なくば一人の御供を

留て證據にせんと云ふ

股肱の臣を一人だに

如何でか残し給ふべき

詮方なくも御旗を

彼に與へて虎の口

僅かに遁れ給ひけり

斯かる所に義光は

草鞋の緒をや切にけん

遙かに後れ居たりしが

宮に追着き申さんと

足を早めて過る折り

庄司にハタと行き遇り

●錦の御旗

下部が持てる旗見れば

正しく錦の御旗なり

不思議に思ひ尋れば

事云々と答ふるに

村上之れを聞くや否な

くわつと怒りて打ち睨み

這はそも如何に何事ぞ

忝しくも畏くも

四海の主におはます

天子の御子が朝敵を

討伐あらん其の爲めに

其れが門出の道なるに

汝等如き下郎輩

斯る振舞すべきかと

持ちたる旗を奪ひ取り

大の男の襟つかみ

四五間計り投げたるは

獅子の荒しに異ならず

此の怪方に恐れけん

彼等庄司は一言も

半句もなくて縮みけり

義光御旗を肩にかけ

程なく宮に追ひつきて

御前に伏して事の由

具さに申し上げしかば

宮は喜び給ひつゝ

269
633

發行所

三 盟 舍

東京市淺草區福井町一丁目四十三番地

不許複製

發行所
東京市淺草區左衛門町一番地
岩見米三郎

發行者
天野重助

著作
綠葉散史

明治四十四年十月五日發行
大正元年九月十日合本御届

定價金拾錢

村上義光の歌

類稀れなる勇氣ぞと
御言葉厚く賜りぬ
夫れのみならず義光は
吉野の奥の戦ひに
宮に代りて討死し
御旗に討し日と月に
光り争ふ其の譽れ
大和男兒の龜鑑なり

村上義光の歌終

終

